

ステムセル研究所



清水 崇文 社長

5年内に時価総額1000億円

◎…さい帯血で何ができるようになるのでしょうか。

「例えば、低酸素性虚

血性脳症という脳障害がある。へその緒が首に絡まるなどの理由で、出産時に脳へ十分な血液が回らず、仮死状態で生まれてくる子供たちがいる。

こうした脳障害は脳性まひ、ひいては自閉症につながるが、さい帯血由来の幹細胞を使った新たな治療法の研究開発が進む。さい帯血を治療に使えるようになる時代が確

実に迫ってきている」

◎…研究開発の進捗は。

「海外では自閉症や脳性まひに対する第2相臨床試験(P2)が終わり、国内でも自家細胞によるP1が完了した。共同研究を行っている大阪大学や東京大学などのアカデミアが良い結果を報告している。今後、広く利用されることになるだろう」

◎…少子高齢化も進むなかで、お産をターゲットにしたビジネスに継続性はありますか。

「海外では現在、年およそ80万回のお産が行われている。ステムセル研究所では、そのうちの約1%でさい帯血を提供してもらっている。この割合を増やすことで、少子化にかかわらず、幹細胞の保管数を増やせるだろう。また、細胞バンク事業がまだ広がっていないアジアでは人口も増加しているため、影響は少ないとみている」

◎…海外事業の展望は。

「欧米を中心に、保管事業を担う会社が世界に

20〜30社ある。一方で、保管事業が浸透していないのが東南アジアを中心とするアジア諸国だ。現地でゼロからというのは、さすがに難しいので、M&A（合併・買収）などの手段も含めアジア市場を狙っていく」

◎…今後の投資計画などは。

「黒字を維持すること優先に検討していく。細胞バンク事業としては、横浜に拠点を整備したので、数年後に西日本にも拠点を整備したい。これは、さい帯血採取から処理までの時間を安定化させるためだ。また細胞治療や細胞医薬への原料提供などの事業も進め

ていく。将来は不妊治療などにもチャレンジし、妊娠から出産までを総合してケアする会社にしていきたい。近接分野の拡大でも、手段としてM&Aなどを考えている」

◎…目標としている時価総額1000億円への見通しは。

「現在の時価総額が約250億円（取材当時）。国内バンク事業は、大規模な設備投資も終わっており、3〜4年で3倍には伸びると予想している。残りの250億円を細胞医薬への原料提供や、新規に進める海外事業などで上乗せすることで5年以内の1000億円は可能だ」（橋本隼太）

西日本に新拠点整備も

アジア開拓、M&A検討